

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 25 日現在

機関番号：34315
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2008～2011
 課題番号：20520189
 研究課題名(和文) 鷹書類の調査と研究

研究課題名(英文) An investigation and study of the book of the falconry.

研究代表者

中本 大(NAKAMOTO DAI)
 立命館大学・文学部・教授
 研究者番号：70273555

研究分野：日本中世文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：鷹狩り、古技保存、鷹書、宮内庁書陵部

1. 研究計画の概要

本研究は、「鷹狩り」という我が国伝来の文化の実相解明を目指すべく、中世期に盛んに制作された鷹書類の調査と研究を進めるものである。これまで人文学系の分野において鷹書類に関する研究は、ほとんど進められてこなかった。そこで本研究では、まず、国内においてまとまった数の鷹書類を所蔵している宮内庁書陵部などの公的機関を中心に、その存在が確認できる鷹書類を適宜マイクロフィルム化して複写を蒐集する。次いで全国に点在する埋もれた鷹書類についても発掘・調査を進め、新たに発見された鷹書として紹介してゆく。

また、蒐集したテキストの複写や現物については、全て翻刻して書誌情報を整理し、データベース化して各書の特性が一覧できるように整理・分類する。そのために、研究代表者の中本大と研究分担者の二本松泰子・山本一・黒木祥子が発起人となっている「鷹書研究会」でテキスト類の輪読を行い、本文の解釈と各テキストの位相解明を目指して注釈を付す作業を進めてゆく。ちなみに、その成果の一環として日本文学の分野において初となる鷹書の注釈書(伝承文学全注釈叢書『立命館大学図書館西園寺文庫蔵鷹書類』、三弥井書店、2012年3月刊行予定)を公刊する予定である。

2. 研究の進捗状況

現段階において宮内庁書陵部に所蔵されている鷹書類のうち、約一〇〇冊以上の鷹書類についてマイクロフィルム化し、その複写を入手した。宮内庁書陵部で所蔵されているテキストは、戦前の宮内省の方針により、そ

の大部分が諏訪流のテキストとなっている。この諏訪流の鷹術とは、我が国の鷹狩りの主流をなすものであるため、書陵部所蔵のテキストについての詳細を調査することは、我が国の放鷹文化の基幹を明らかにする重要な手立てといえよう。現在、鷹書研究会で書陵部蔵の各テキスト類を翻刻して注釈を付す輪読作業を続けている。その成果の一環としては、たとえば、諏訪流の代表的なテキストである『啓蒙集』の全文翻刻が公刊されている(二本松泰子『中世鷹書の文化伝承』三弥井書店、2011年2月)。

その他にも、国立公文書館に所蔵されている鷹書類を約二〇冊、国立東京博物館に所蔵されている鷹書類を約一〇冊、尊経閣文庫に所蔵されている鷹書類を一冊、京都府長岡京市調子家文書の鷹書一冊、京都府福知山市桐村家伝書の鷹書二冊、天正一二年の奥書を有する廣田宗経筆の「鷹書」五冊、あとは全国の公立図書館や大学が所蔵している鷹書類の複写もしくは現物を数一〇冊蒐集した。蒐集したテキスト類はすべて翻刻し、書誌情報を整理してデータベース化する準備を進めている。さらに調査対象を拡大して、韓国の鷹書類についても注目し、ソウル大学校中央図書館・ソウル大学校奎章閣・韓国国立中央図書館に所蔵されている鷹書の複写を入手、国内で蒐集したテキスト類との比較資料とした。

なお、以上で得た研究成果を、適宜、一般にも広く還元すべく、2008年～2010年の毎年11月に鷹狩りと所縁深い地域において「放鷹文化講演会」を開催している。

3. 現在までの達成度

本研究課題の当初研究目的の達成度は
おおむね順調に進んでいる。

と判じられる。その理由は、上掲2.の項目
で述べたように、本研究最大の目的である国内
の鷹書類の蒐集について、ある程度の数
が到達できたことと、さらにそれらのテキスト
について書誌情報の整理や翻刻・注釈作業が
相応に進み、データベース化する基礎作業の
準備が十分に整ったことなどが挙げられる。
また、研究分担者の二本松泰子が、2011年2
月に上梓した『中世鷹書の文化伝承』は、鷹
書に関する初の専門書であり、本研究の作業
を経て得られた研究成果を総合的にまとめ
たものである。このような鷹書に関する学術
書が出版されたことも本研究が順調な成果
を挙げている証左といえるものであろう。

なお、本研究の成果を一般にも公表するべく、
毎年開催している「放鷹文化講演会」では、
「諏訪流保存会」による放鷹実演と併せて常
に400人～1,000人にのぼる数の市民が
参加し、地元のマスコミからも積極的に取り
上げられている。これもまた、本研究の到達
度が広く一般社会に認知される水準にまで
達しつつある一例と見なされるものであろ
う。

4. 今後の研究の推進方策

採択期間最終年度となる2011年度もまた、
これまで同様、国内の鷹書類を調査・蒐集し、
データベース化に向けての情報整理を中心
に作業を進めてゆく。その基盤となる活動拠
点も、これまで通り鷹書研究会が主体となる
予定。具体的には、年6回の開催を予定して
いる例会での輪読・研究発表と、年2回の開
催を予定している放鷹文化講演会（本年度は
長野県東御市と愛知県豊橋市）を通して本研
究の成果を推進し、随時公表してゆく。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線）

〔雑誌論文〕(計5件)

- ! 黒木祥子、立命館大学西園寺文庫蔵『西園寺家鷹秘伝』について、神戸学院大学人文学部紀要、査読無、第30号、2010年、238頁～248頁
- ! 山本一、「やまひめに」類鷹百首の伝本について、金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要、査読無、第2号、2010年、141頁～150頁
- ! 二本松泰子、鷹飼「せいらい」の展開と享受 諏訪流の伝承をめぐって、説話・伝承学、査読有、18巻、2010年、127頁～144頁

! 二本松泰子、政頼流の鷹術伝承 - 立命館大学西園寺文庫蔵『政頼流鷹方事』をめぐって -、伝承文学研究、査読有、第58号、2009年、12頁～25頁

二本松泰子、中世公家社会における鷹術伝承の成立 立命館大学西園寺文庫蔵『西園寺家鷹口傳』所載の鷹説話群の検討から、説話・伝承学、査読有、第15号、2008年、19頁～30頁

中本大、寛文年間の五山の文事、日本古典文学研究の新展開、2010年、462頁～481頁

〔学会発表〕(計3件)

! 二本松泰子、「せいらい」の展開と享受、説話・伝承学会2009年度大会、2009年4月19日、天理大学

! 二本松泰子、鷹書から見た使役動物観、動物観研究会公開ゼミナール2008、2008年12月7日、東京農工大学

! 二本松泰子、政頼流の鷹術伝承 立命館大学西園寺文庫蔵『政頼流鷹方事』をめぐって、伝承文学研究会平成20年度大会、2008年8月31日、立命館大学

〔図書〕(計2件)

二本松泰子、三弥井書店、中世鷹書の文化伝承、2011年、346頁

二本松泰子、三弥井書店、月庵醉醒記中巻、2008年、107頁～114頁（本文）289頁～306頁（補注）